

私たちは見えているのだろうか ヨハネ福音書9章35～41節
細井 茂徳

現代社会は外見や社会的地位といった「スペック」で人間の価値を品定めし、そこから零れ落ちる者を冷酷に排除します。生まれつき目の見えない男性も、主イエスによって癒やされながらも、真実を語ったことで宗教権力から会堂を「追放(破門)」されました。しかし、孤独の極みに置かれた彼を、主イエスは能動的に「捜し出し」て出会われたのです。ここから真の救いへの歩みが始まります。

I. 人間的な「追放」の逆説

社会的地位や属する集団から弾き出されることは、人間的には最大の絶望です。しかし神の摂理においては、私たちがしがみついていた誤った依存先から引き離され、主イエスの懷へと「追い込まれる」という最高の恵みの契機となります。世の不条理やエゴイズムを経験する中でこそ、ただキリストのみに寄り頼む真の信仰が生まれるのです。

II. 礼拝する信仰への開眼

周囲からの評価に怯え、虚しい幻影ばかりを追いかけている状態こそ「靈的な盲目」です。主は男性に「あなたは人の子を信じるか」と問いかけられました。主イエスのまなざしに促され、男性は自分を愛し救ってくださった方を「主よ、信じます」と告白し、ひれ伏して礼拝しました。主は私たちの目を「他人の目」から「神の愛」へと開かせてくださいます。

III. 「見える」と言い張る傲慢

真の盲目とは「自分はすべて分かっている、正しい」と過信する傲慢さです。ファリサイ派の人々は、自らの知識に自惚れて御子を認めようとしませんでした。信仰とは、多数派の陰に隠れることなく、「世間がどう言おうと、私はこのキリストを信じる」と、一対一の対峙の中で、単数形の「私」として応答し、自分の全生涯を主に委ねる決断なのです。

結 び

どこにも居場所がないような暗闇の中でうつむく必要はありません。主イエスは今、あなたをその愛の眼差しで見つめ、人生のすべてを預けるよう招いておられます。この主に信頼し、確かな希望の第一歩を踏み出しましょう。